



У ПОСЛѢДНЕЙ ЧЕРТЫ

М. П. АРЦЫБАШЕВЪ

著 フェシーバイツルア

線一の後最

譯 夫 正 川 米

版 出 社 潮 新

非賣品

第二期

世界文學全集(13)

最後の一線

第二回配本

昭和五年六月廿五日印刷
昭和五年七月一日發行

翻譯者 米川正夫

發行者 佐藤義亮

發行所 東京市牛込區矢來町

新潮社

電話牛込

四八八八八
〇〇〇〇〇
五番番番番番
六番番番番番
七番番番番番
八番番番番番
九番番番番番

振替東京 二二三、四五〇番

東京市小石川區江西戶川町 富士印刷株式會社印刷

解 說

十九世紀の終りから二十世紀の初頭にかけて、露西亞文學が長い間の傳統となつてゐた人道主義的、社會教化的傾向から次第に離れて行つて、極端な個人主義的思想を基調とする謂はゆるモデルニズムに移つて行つたのは、人のすでに知るところである。これは政府の極端な壓迫政策のために萎靡沈滞して、無氣力な灰いろの小市民的生活の泥沼に沈んでゐた、當時の一般社會に對する反動として生まれた現象で、若々しい新鮮な生活力と、敏感純眞な魂を持つた新時^{ヤンギエネレシコン}代は、對社會的活動に對する希望と勇氣を失ひながらも、平凡卑賤な町人的生活に同化しきる事も出来ないで、そのヂレンマから遁れる出口を、美の禮拜とニーチェの流れを汲む超人哲學に見出したのである。彼らは周圍を領してゐる家常茶飯の生活の上に、高く超越した獨自の世界を築き、貴族的に洗煉された複雑な趣味や、輝かしき力づよい個性の魅惑に生きようとした。彼らの文學はあるひはネオ・ロマンチズム、あるひは象徵主義、あるひは頹敗派等の名をもつて呼ばれてゐるけれども、現實生活、集團的社會生活からの逃避といふ點において、揆を一にしてゐると言ふことが出来る。彼らは自我もしくは美の象牙の塔に籠もつて、平凡瑣末な醜い現實から美しい傳説を作り出さうとした。したがつてこの時代の文學には、神祕的、幻想的、もしくは異國趣味的要素が横溢して、そのために「世相の死」、すなはち寫實主義文學の滅亡を呼ぶ聲さへ聞こえたくらゐであるが、しかしこのモデルニズム文學の中にも、より多く寫實主義的手法を維持した作家も、ぜんく皆無ではなかつた。クープリンなどはそのもつとも鮮明な代表者である。アルツイバーシエフも大體の分類に従へば、寫實派の陣營に屬する作家ではあるが、彼の抱いてゐた獨自の世界觀は、トルストイ、ツルゲーネフなどから發してゐる、朗かな人生肯定の寫實主義藝術とは、著しく趣を異

にしてゐる。彼は客觀的アポロ型の作家たる要素も有してゐるけれど、むしろ主觀的デオニソスの破調がより多く彼の作品を支配してゐるからである。

ミハイル・アルツイバーシエフはかの有名な小説『サーニン』によつて、露骨な性慾描寫の作家として、一躍世界にその名を宣傳せられるに到つたが、しかし彼が始めて文壇に初舞臺した時分には、彼の作風はかなり異なつた方向を指さしてゐたのである。彼は、一八七八年に一警察署長の子として生まれたが、その生地は彼自身も覺えてゐないものである。アフトゥイルスクといふ田舎町の中學に五年級まで籍を置いてゐたが、その後畫家にならうと志して、ハリコフの美術學校に入學したが、一年たらずでそれも抛擲して了つた。その後、地方新聞などに投稿したのが動機となつて、遂に作家として立つやうになつた。彼が文學者として名前を知られるやうになつたのは、『革命家』『村』『血痕』『朝の影』などといふ短篇を發表してからである。これらは一九〇四年から一九〇六年へかけての革命——日露戰爭によつて誘導された全國的革命を題材としたもので、そこには叛軍と鎮壓隊の間に演ぜられた暴行、流血、殺戮、凌辱などが、線の太い、鋭い筆で描き出されて、人をして慄然と戦かせるやうな、息づまるやうな印象を與へる。その中でも、叛徒の防塞戰とその後の銃刑の光景を詳細に描寫した『血痕』は、このテーマに捧げられた作品の中で、最も感銘の深い代表作と數へられてゐる。これら初期の短篇には、強權の暴壓に對する公憤とプロテストの精神、その暴力を拂ひ落とさんがために、生命を賭して奮起した虐げられたる民衆に對する同情が、かなり明瞭に觀取せられる。とはいへ、かういふ公民的社會的動機が、右に舉げた諸篇の基調となつてゐるとは言へない。これらの作品のすべてを支配してゐるのは、血みどろな死骸の山、斷末魔の呻吟、打ち割られた頭蓋骨、罪のない小兒の殺戮、多くの兵士に強姦される無邪氣な少女の叫び、白雪の上になまなましく残る銃殺された叛徒の血——すべてかういふ凄慘な、どす黒い苦痛と恐怖の雰圍氣である。若い頃から不治の肺患に苦しんでゐたアルツイバーシエフは、露西亞の全土を充たしたこの無

意味な、醜い、慘酷な、集團的殺戮の物凄く繪巻き物に壓倒されて、勇敢な争闘的精神を半ば癡痺せられ、さながら催眠術をかけられたもののやうに、無氣味な謎のやうな死の顔から、目を放すことが出来なかつたやうな風である。

一九〇七年に書いた中篇小説『人間の波』も革命の暴動を主題としたもので、オデッサに於ける戦闘巡洋艦『ボチョームキン』の乗り組み員の叛亂が中心に置かれてゐて、當時かなり世評の高かつた作品であるが、こゝでも背景に大きく浮き出してゐるのは、依然としても凄惨な死の微笑である。これから以後、死の問題はアルツイバーシェフに取つて、生涯はなれる事のない創作の主なる題目となつた。題材は既に革命から離れてゐるが、優れた中篇『ランダの死』なども、滅び行くものの哀愁と恐怖に捧げられた哀歌である。

しかし、いつまでもかういふ絶望と暗黒の境地に彷徨するのは、結局おのれ自身に死を宣告することである。そこに何らかの打開の方法を講ずる必要があつた。アルツイバーシェフはこの打開の道を性愛の中に見出さうとした。彼がこの道へ出て行つたのは、當時一般青年の頭腦の支配者命令者であつたニーチェの謂はゆる「自由にして強き性慾は力あるものの賜ものなり」といふ個人主義的思想の影響によることも無論であるが（もつとも、彼自身はニーチェを好まなうと言つてゐるけれど）、また一方に於いて、時代の影響といふことも見逃す譯に行かない。當時の露西亞社會は、殘忍な暴力によつて鎮壓された失敗せる革命の後を承けて、再び極度の萎縮状態に陥り、政治に對する甚しい無關心を示し始めた。少くとも、積極的政治行動や革命運動は表面上影を潜めて了つた。そして文學の方面では、この大勢が露骨な性慾小説の流行となつて現れた。革命による精神的高揚と緊張の反動として、失望と銷沈に浸り切つてゐた疲弊せる社會が、一種の自己癱瘓の方法として、個人的興味の中でも最も刺激の強い性愛の方面へ、翕然として傾いたのは怪しむに足りない。カメンスキイ、ゴルビーツカヤ（閨秀作家）などの猥褻文學者（ポルノグラフィスト）が相ついで擡頭し、忽ち讀書界の寵兒となつた。この趨勢に乗じて現れたアルツイバーシェフの最初の長篇小説『サーニン』（一九〇七年）は、多くの安

價な通俗的好色小説を壓倒して、この種の文學の王座を占め、當時の若き知識階級のバイブルとなつた。この小説が
いかに偉大な成功を博したかといふ事は、自由戀愛を意味するサーニニズムなる言葉が、新しい流行語として一般社
會に行はれ、青年男女の間に多くの模倣者を生み出したために、革命思想から人心を轉換させる緩和劑として、性慾
文學の横行に比較的寛大であつた當局でさへ、第二版以後この作品の發賣を禁止した事實に徴しても、想像すること
が出来ると思ふ。

小説の主人公サーニンは極端な個人主義者で、彼に言はせれば、人生の目的は自己の欲望の満足と歡樂の追及のみ
に存し、それ以外の人間活動はことごとく皮相な虚偽的なものに過ぎないのである。人生について彼の知つてゐる事
は、生活が彼自身にとつて苦痛であつてはならぬといふことである。それがためには自然の欲求を満足させることが
必要である。人間は餘り長い間の社會的生活の約束に束縛されて、性慾を動物的な醜いものの如く卑しめて、その結
果、貧弱な臆病な不具的存在となつて了つた。無論、人間が動物と選ぶところのない生活をしてゐた間は、野蠻で粗
野な不幸な時代であつたに違ひないが、肉體が精神のために壓倒されて、蔭の方へ押し込められて了つた現代は、あ
まりに無氣力で意氣地がなさ過ぎる。従つて、今後來るべき新しい生活は、原始的な動物生活でもなければ、修道
院的な禁慾生活でもなく、兩者を相融合した靈肉合致の生活でなければならぬ——とかういふ事になる。しかし、作
品そのものに描かれてゐるサーニンは、たゞ自分の肉體的欲望を満足させることよりほか、何ごとをも考へてゐない
粗野な動物的存在として、より多く讀者の頭に印象される。彼は刹那々々の衝動に任せて、その場限りの情慾の満足
を求める事のみ没頭し、常住座臥たえず女性の肉體を領有する機會のみを窺つてゐるかのやうに思はれる。彼は自
分の肉身の妹さへも、さういふ目をもつて見ずにゐられない男なのである。靈肉合致どころか、精神的要求の存在さ
へ疑はれるほどである。もつとも、小説『サーニン』は思ひ切つて露骨な性慾描寫と並行して、もしくは交互的に、

個人主義の福音を説き肉の解放の理論^{セオリー}を述べた議論が、對話の形式で極めて豊富に盛り込まれてゐるけれど、これらの雄辯な議論もその内容は比較的單純幼稚で、卑俗な感じさへ與へるので、これによつてサーニンの人格を高めることには成功してゐない。

では、一體なにがこの作の異常な成功の原因となつたのだらうか？ 無論、篇中いたる所に充滿してゐるエロチシズムもその主なる原因の一つであらうが、單にそればかりであつたなら、エルビーツカヤなどの猥雜作家^{ポルノグラフィスト}と別に選むところはないので、發表後まもなくあらゆる外國語に翻譯され、殆ど三十年に近い今日まで生命を失はず、古典的價值さへ生ぜんとしてゐる事實が、説明したいことになる。譯者はその原因をアルツイバーシェフのみづゝした、鮮かな、男性的に颯爽とした描寫の筆と、彼の強烈な素^{タム・ベメント}質に歸すべきであると思ふ。彼の自然描寫は色彩が濃厚でタツチが力強く、しかもその中に作者の鋭い感覺が溶かし込まれてゐるので、咽^むせるばかりの香氣を放散して、十九世紀の露西亞文學に見られなかつた近代的味はひを藏してゐる。この點は當時の讀者にとつて一つの驚異でさへあつた。第二に、人間としてのアルツイバーシェフは極めて強烈な生活慾を有しながら、生來の痼疾のためにその欲望を満足させる可能を奪はれ、病的なほど激しい死の恐怖に苦しめられてゐたので、この二つの精神的要素から來る破調^{ワグツナミ}が、獨自の力となつて、彼の創作に自暴自棄な奔放さと深刻味を添へてゐるのである。

とにかく、アルツイバーシェフは『サーニン』に於いて、オリムピヤの神々のごとく朗らかで、清淨な、力づよい性慾の開放をこの地上に實現せんとしたけれど、それは無數の約束や條件で縛られた、現代の人間社會では不可能事であるのを悟つて、物語りの終りにサーニンが進行中の汽車から飛びおり、無人の曠野の中をあてもなく闊歩する場面で筆を止めてゐるが、これはつまり現實生活から逃避して、空想の世界に隠れが見いださうとする、一種の藝術的自慰であると言はなければならぬ。

かうして、靈肉合致の三昧境に突進せんとして、苦い幻滅の失望を嘗めさせられたアルツイバーシエフは、やがて一切の罪を女性に歸し、女性の無理解と淺薄と淫蕩のために、男性の有する純真高潔な魂が卑俗化されるものと信じ、かつて兩性の解放を唱道したのと同じくらの劇しきをもつて、女性攻撃の火蓋を切つた。彼はそのテムペラメントにふさはしいが、むしや、な猪突的態度で、ストリンドベルヒやオットー・ワイニングゲルにも劣らぬほどの、反女性主義者と化したのである。一九一一年の短篇『小さきオットー』を手はじめとして、『ある頬打ちの話』『嫉妬について』及び一九一三年の戯曲『嫉妬』及び『野蠻人の法則』その他に於いて、女性に對する執拗な根深い憎惡を、繰り返し繰り返し藝術の形で表現した。

しかし、かういふ否定的な態度で如何に多くの論證を重ねても、肯定的意義を有する何ものかに到達し得るはずがない。結局アルツイバーシエフの人生觀が、完全な厭世主義に落ちて行つたのは當然である。彼の暗黒な人生否定論が全圓的に結晶されたのは、『サーニン』につぐ第二の長篇であり、彼の藝術の一大綜合ともいふべき『最後の線』である（この小説は一九一〇年から一二年にかけて、文集『地』の誌上に發表せられた）。標題に示す最後の線とは無論、人生行路の最後に横たはる一線、即ち死線の意味である。この作品の表現手法は從來の諸作と同じく、明快な寫實主義であるけれど、その構想は極めて奇怪な、殆ど狂的なものと言つていゝほどである。とある田舎町に飄然と現れたナウーモフといふ年若い技師が、人生は何の意味もない醜い苦痛の連續に過ぎぬといふ確信から出立して、すべての人をこの無意義な苦痛から救済するために、人類絶滅の誓ひを立て、死の福音を人々の間に宣傳し始める。すると、一見なんの特徴もなさうに思はれる、この平凡な一技師の有する魔術的な魅力に引きずられて、作中のおもなる人物が悉くわが生命を斷つて了ふ。天賦の才能と美貌に恵まれた畫家のミハイロフは、何のこだはりもない、明るい、藝術家らしい享樂主義の性格に任せて、花から花へ移り行く胡蝶の如く、一步ごとに對象を變へながら、刹那利

那の歡樂をあきり求めてゐたが、遂に單なる肉の満足が意味のない永久の反覆に過ぎない事を痛感し、藝術の不滅といふ信念さへ空しい蜃氣樓と化したのを見、自分の刹那的情慾の犠牲となつた少女の自殺といふ悲劇に直面して、これらすべての精神的重荷に耐へきれないで自殺する。純粹な抽象的思索の結論として、生きる事の無價値を悟つた騎兵將校クラウゼは、死の恐怖に打ち勝つために騒がしい饗宴の席で、衆人環視のたゞ中で額を彈丸で打ち抜いて了ふし、平凡で善良な家庭の主たる二等大尉トレニョーフは、妻を對象とする器械化した習慣的愛撫に飽きて、その不満から生じた見苦しい諍ひに前後を忘れ、殆ど無意識的に自分の喉を剃刀で掻き切つて了ふし、會計官吏リスコフは貧しい、みじめな、蟲けらのやうな存在を續けながらも、いつか作家として文壇に立たうといふ、滑稽にしてかつ悲痛な空想をはぐむ事によつて、僅かに生の意義と價値を見出してゐたが、一朝にしてその幼い夢が容赦ない手に破られた時、意識せずしてナウーモフの魔力に擱まれてゐた彼は、同じくこの狂信的憎人主義者の犠牲となつて了ふ。最後に輝かしい人類の未來を信じて、常にナウーモフの人生否定論と戦ひ續けて來た、社會主義者のチージュさへも、次第に忌はしい、灰色の、凡俗卑賤な日常生活に同化される自分自身に、嫌惡と絶望を感じて縊死を遂げる。そのほかたゞ一人の戀ひ人を求めて、自分自身の狂暴な情慾の嵐に悩みもがいてゐた、多血質な純情の蕩兒アルブゾフさへも、長い間の追求の對象であつたネルリの肉體を領有すると共に、發作的嫌惡の念に襲はれて修道院へ世を遁れ、最後の精神的避難所を失つた薄倖なネルリも、同じく自殺を企てることになつてゐる。

この梗概によつても想像されるやうに、アルツイバーシェフは人生のあらゆる努力が遂に空の空であつて、墓上の踊りに過ぎないといふ厭世哲學を、ありとあらゆる藝術的形象と多辯な論議の助けをかりて、この一篇に儼然樹立させようとしたものに相違ない。それ故、この物語りには右に述べた六つの自殺のほか、なほ四つの死が挿話の形で、詳細に描寫されてゐる。第一は殆ど自意識を持たぬ幼兒の死であり、第二は年寄つた大學教授、第三は華かな過去を

もつ若い女優の病死であり、第四は決闘による壯年の將校の横死である。疑ひもなく作者はこれによつて、ナウーモフなる人物に託せられた根本思想を、徹底的に讀む者の脳裡に印しようとな圖したのであらうが、しかしこの厭世哲學と交互に織りまぜられてゐる性慾描寫（つまり生活享樂の再現）や美しい自然描寫が、あまりに生き／＼として明るい色彩に充ちてゐるので、死の描寫や滅亡の理論は作者の豫期したやうに、壓倒的な戰慄的印象を與へないで、むしろ物凄い腐屍の臭ひと豐滿な女性の肌の香と、斷末魔の呻吟と甘い接吻の音と、日光に輝く自然と醜い灰色の田舎町の生活と——かういふものが互に相交錯し融合して、そこに獨自の不思議な調和——破調の中なる調和（もしかういふ表現が許されれば）を生み出してゐる。譯者はこれを言葉や思想で捕へることの出來ぬ藝術の祕密と呼びたい。もし作者にさへ意識せられなかつたこの微妙な藝術の作用がなかつたら、この作品は現在有してゐる價值の大半を失つたに相違ない。なぜと言つて、藝術は創造でなければならぬのに、一切の否定すなはち虛無の上に何の創造もあり得ないからである。

事實この『最後の一線』はかういふ不可能を敢て冒して企圖された作品であるから、その構成に著しい不自然さを藏してゐる。第一にその基礎的構想、即ち一箇の無名の青年の暗示や教唆によつて、多くの人が死を決するといふ事は、到底あり得べき現象として受け入れられない。或ひは極めて特種の場合として、有り得べき事かも知れないけれど、それにしても、現代のメフィストともいふべきナウーモフの人物性格が、ほとんど藝術的に具象化されてゐないし、多くの自殺者についても、自殺を決行するまでの徑路や、その瞬間の描寫に充分な動機づけが足りない。全體に、作者が筋の運びと結末を急ぎ過ぎて、物語り中の重要な契機を未開拓のままに飛躍してゐるのが、あり／＼と感ぜられる。例へば、アルブーゾフを救ふために、決闘の前夜アウグストフ副官に身を任せたネルリのその後に於ける心理的推移、決闘で副官を殺したアルブーゾフの内的體驗などが、全然抛擲されてしまつて、單なる挿話の如く取り

扱はれてゐる事など、かなり重大な缺點と言はなければなるまい。一口にいへば、アルツイバーシェフは『サーニン』のやうに殆ど筋らしい筋のない、平和な日常生活の描寫に對する時と大差のない態度で、この異常な事件に充ちた小説の筆を取つたために、題材に相應した慎重な創作的用意が不足してゐたのであらう。

もつとも、この種の用意も外面的に見れば全然ない事はない。その最も顯著なものはドストエーフスキイとの類似である。ドストエーフスキイは異常なストライキングな事件を描く天才であつたので、素質の上から彼と共通點を有するアルツイバーシェフが、この大先輩を取つて範としたのは怪しむに足りない。例へばクラウゼ少尉補が『惡靈』のキリーロフを聯想させ、アルブゾフが『白痴』のラゴジンを思はせるが如き、ネルリがドストエーフスキイの好んで描いた猛禽型の女性に髣髴たるが如き、アルブゾフとミハイロフの對決の場面が、同じく『惡靈』のキリーロフとゾルホゼンスキイの「魂の格闘」と血脈相通するものがあるが如き、なほ數へれば雙手の指を屈するに足りるであらう。作者自身の思想を物語りの間へ執拗に挿入する手法は、兩者の先天的傾向の然らしめるところと思はれる。ただアルツイバーシェフの鬼才をもつてしても、世界文學の奇蹟的存在である天才に比肩し得ないのは、あまりにも當然すぎることであらう。とは言へ、『サーニン』以來いちじるしく圓熟した描寫の手腕は、いかなる非難をも沈黙せしめるだけの力を藏し、精彩奕々たる個々の場面は、この作者の非凡な才能を充分に證明してゐる。そしてこれらの個々の描寫が相倚り相助けて、この作品の藝術的價值を保有してゐるのである。

彼は十七年の革命後、しばらくソゼト露西亞にとゞまつてゐたが、のち追はれて國外に亡命生活を送ることとなつた。そして一九二二年に感想『永遠の蜃氣樓』、一九二五年に戯曲『惡魔』(ファウスト傳説のグリーエーション)を發表したが、いづれも彼にとつて永遠のテーマたる厭世哲學の敷衍で、ほとんど反響なしに過ぎて了つた。かうして一九二五年ワルシャワの假寓で淋しく世を去つた。(米川正夫)

目次

前

編

..... 一

後

編

..... 二〇

カヴーの繪……エウゲーニヤを打歸して自分の意に従はせるミハイロフ(二六五頁)

最後の一線

アルツイバーシェフ 著
米 川 正 夫 譯

前 編

一

小さな町は曠原の中にぽつんと立つてゐた。もし人が町を出はづれて、蜃氣樓のやうな遠い野や、地平線の上を匍ふ遙かな森の幻や、無關心な高い空などを眺めたならば、この地上に住んで苦しみながら死んで行く、一團の人々のつまらない存在は、決して悲劇的な美文めいたものではなくて、平凡といふより、寧ろ退屈な眞實に過ぎない事は、はつきり悟るに相違ない。

夏は焼けるやうな太陽が曠野の上に懸かり、冬はこの曠野が一面に白皚々たる世界となつて擴がつた。熱い夏の夜などは、山のやうな黒雲がむく／＼ともちあがつて、雷鳴が墨を流したやうな廣い廣い空間を、勝ち誇つたやうに端

から端へ轟き渡るのであつたが、しかし曠野はいつも同じやうにものうげな、謎のやうな、人間とはなんの關りもない姿をしてゐた。

風が吹き起こると、曠野の中に細かい、乾いた埃が舞ひ立つて、さながら生の通はぬ幻の軍勢かとばかり、絶え間なく町の方へ押し寄せて行つた。埃は家々の屋根や窓に降り積もり、ちつと澱んで動かぬ川水の上に落ち、己れの意志を持たぬ柔かい層となつて、町を一面に蔽ふのであつた。さうすると町は世界と共に古い、老朽し切つたもののやうに感じられた。この町の中にある一切の物が、單調で貧弱で、危く風に吹き散らされるのを免れてゐる塵つかのやうであつた。

かうした灰色の田舎町にこそ、緑の木立ちや、薔薇色の山や、青い海や、壯麗な建て物の間などに先んじて、蒼ざめた死の幻影に似た思想の生まれ出る可能があつた譯である。この思想は後に世の中へ出て行つて、地球の全面へ擴

がつたのである。

海中へ投ぜられた巨岩は、跡かたもなく消えて了ふけれど、静かな池の面へ落ちた小石は、必ず遠くの方まで無數の圈を擴げる。大都會の喧騒の中で、毎日いつともなしに行はれてゐる事が、この町では人の魂を底の底まで震撼し、多くの人の心を動搖させるのであつた。

その後事情を探つた人々は、土地の富豪アルブーゾフの工場に新しく招聘せられた、ナウーモフといふ技師に、すべての原因を發見した。それはいかにもありさうな事だつた。實際この陰鬱な男の影が町の生活に蔽ひかぶさつて、事件の開展促進になみ／＼ならぬ影響を與へたのである。しかし本當に目を開いて、周圍を見廻したら、いかなる人間の力も、人生の中に潜んでゐる物を、一厘一毛も増減する事は出来ないといふ事を、觀取しない譯に行かないであらう。實際、人生に於けるすべての物は、深い深い大地の底に根をおろしてゐるので、その根から次第に幹が延びて行つて、晚かれ早かれ、避くべからざる結末に到着するのである。

静かで平凡な日常生活や、慌ただしい混亂雑踏などの間に、もうずつと以前から奇怪な恐ろしい大事變が、徐々と

して熟してゐた。しかしその突發する三四箇月前までは、一切が飽くまで平凡退屈に感じられた。小さな町は暑さに喘ぎ惱んで、世間みな生活が靜かに營まれてゐたのである。

出稽古から出稽古へと忙しげに駆け廻つてゐる、チージュといふ小柄な大學生も、望みのないいら／＼した氣持ちで、倦怠に惱まされてゐるのであつた。

色の褪めた青いバンドつきの、古びた白い學生帽は、耳の邊まで被さるほど深く、尖つた頭蓋の上に載つてゐて、その下では様々の想念が、絶え間なく動いてゐるのであつた。彼が大都市に居住する權利を奪はれて、この田舎町に尻を据ゑてから、もう二年になる。しかも、そのうちにこゝから足を洗ふといふ望みは全然なかつたので、心の底からこの町を憎んでゐた。惱ましいほど、胸の痛むほど憎んでゐた。どこかよその方では、人類の偉大な争鬭生活が、數百萬の火花を散らしつゝ、苦痛と歡喜の中に呻吟や叫喚の聲を發しながら、徐々と鍛へられてゐるにも拘らず、こゝでは開闢以來たれ一人として、高調した言葉も聞かなければ、生きた顔も見ることがないやうに思はれた。みな眠つてゐるのでもなければ、姿を潜めたのでもなく、また全然

生きてゐないでもない。たゞ道傍の埃の中に捨てられた、一塊りの蟲けらのやうに、うよ／＼と露めいてゐるだけなのであつた。

太陽は町の眞上に懸かつてゐた。そして空氣は暑熱のために慄へながら、炭火の火氣のやうに、ちら／＼と垣根づたひに流れてゐた。がらんとした並木街に立つてゐる、閑れた骸骨じみたアカシヤの木は、骨ばつた枝を力なげに垂れ、その下には息もたえ／＼な、貧弱な、乾からびた陰が横たはつてゐた。殆どすべての窓は日避けに鐵戸を閉めてゐたが、その中で汗にまみれてぐつたりとした、無思想、無感覺の人々が、炎熱と倦怠のために、惱ましげに喘いでゐる様が想像された。何もかもまるで死に盡くしたやうになつて、雀どもの轉りさへ聞こえなかつた。チージュは汗みどろになつて、並木街を走りながら罵るのであつた。

「畜生めら！……こないま／＼しい所へ、何の必要があつて町を立てたのだ！……一體ほかに場所が見つからなかつたのだらうか、まあ考へても見るがいゝ！……一體誰があんな連中をこゝへ引つ張つて來たのだらう？……實際この世界には森だつて、川だつてあるぢやないか……それなのに、わざ／＼面あてがましくこんな所へ……何といふ厄

介なばか者らだ！」

憎惡の念が彼の胸を締めつけた。しかし何よりもいけなしい事には、それは對象のない憎惡だつたのである。チージュは複雑な必然の網が、かうした曠野よりもつと悪い所へすら、人間を驅り立てて行く事を、人一倍よく承知してゐた。もし誰か人が訊ねたら、チージュは別に大して思案もしないで、「そんな事は問題ぢやない。人はどんな所に生活しよう、依然として、最も廣く豊かな意味に於いて、人間であり得る。」と答へたに相違ない。しかし、何かしらある物が彼を壓伏して、彼と太陽の間に立ち塞がりながら、未來の代りに何やら灰色な空虚な物をさし示した。それが彼の心に絶え間なく、神經的な憤懣を呼び起こして、周圍のあらゆる物に毒を注ぎかけるのであつた。

並木街の向かうの端からチージュの方へ向けて、制帽を被つた一人の男が歩いて來た。あたりは極度な空虚と死の氣に充ちてゐるので、がらんとした大きな廣場の中に現れた生きた人間の顔が、不愉快に感じられるほどであつた。廣場の上には幾棟かの赤煉瓦の店と、太陽で白熱せられたやうな白塗りの教會が、ちつと不動の姿勢を保つてゐた。さながら永久にとざされたやうな、重々しい教會の鐵扉の上

には、大きな錠前が下がつてゐる。

チージュは近視だつたけれど、まだ大分遠い處から、知りの會計官吏ルイスコフだと氣がついた。ルイスコフはまるで呑氣さうな、といふより、寧ろ輕はずみな態度で杖を振り廻しながら、ゆつくり／＼と歩いてゐた。チージュは擦れ違ひさま、馬のやうな齒をして、色のない小さな目を光らせてゐる、黄色な長い顔を平然と見やりながら、ちよつと帽子を持ちあげて、さつさと先へ走つて行つた。ルイスコフが杖を振り廻しながら一方へ進んで行くと、チージュは一層せはしさうに反對の方へ歩いて行つた。彼等は互に何一つ言ふべき事がなかつたのである。

もし小柄な大學生がいま少し注意ぶかくルイスコフを見つめたならば、彼は必ずその表情に打たれたに相違ない。會計官吏の小さな鈍い目は、ちよつと動かなかつたけれど、その中には緊張した、化石のやうな思想が凍り付いてゐたのである。正しく間隔を置いたその長い足の運動も、ちよつと上へ向けたま／＼と動かない顔も、まるで自働人形か何ぞのやうに、少しも生の通つてゐない、息づまるやうな印象を與へるのであつた。彼は他人の意志に依つてその運動を押し止められ、何の必要もないばかげた螺旋人形か

何ぞのやうに、わきへ片付けられて了ふまで、永久にこつこつと歩き続けさうに思はれた。

しかしチージュはこの呪はれた町のもつてゐるものに、何から何まであき／＼して了つてゐたので、こゝには極めて平和で平凡な、俗惡なもの以外、何一つ存在し得ないやうな氣がした。その上、彼は心底からルイスコフを輕蔑してゐた。なぜと言つて、自分の興味の圈外に住んでゐる人間を、ことごとく輕蔑してゐたからである。會計官吏の顔は彼の心に新たに油然として湧き出る、憤懣の情を呼び醒ますばかりであつた。

「ふん、あれでもやはり生きてゐるのだ。」蒼穂めた額から汗を拭きながら、チージュは機械的な苛立たしさを覺えつゝ、かう考へた。「しかもどうだらう、まるで何か偉大な事業でもしてゐるやうな氣であるのだ……いち／＼汗みどろになつて、蠅に一杯たかられながら、何だか譯の分からない事を書いて、會計課長にべこ／＼頭を下げ、簿記が／＼の首席を蒙る人のやうに思つてゐるのだ……それから娘つ子とも一緒に並木街を散歩して、一番しまひにその中の一人に幸福を授けてやり、新しい會計官吏を半ダースくらゐ生ますのだ。その中の一人が簿記方の首席になるかも知れない